2015年3月20日
季刊 年4回（3,6,9,12月）発行

支え合い、備え、いのちをつなぐ 第12号

震災リゲイン Pressプレス

震災復興支援メディア 全国4万部配布
発行元：一般社団法人 震災リゲイン 発行人：相澤久美 編集人：高木伸哉

編集部：〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6 Tel：03-3584-3430 Fax：03-3560-2047

第12号 復興という未来へ

2面 ● 女川駅前計画レポート
3面 ● 沿岸部災害公営住宅整備状況
● 読者プレゼント
4面 ● 人と復興／企業の取組

あなたにもできる復興支援

寄り添う心を持ち続ける意味

地震国の私たちが、復興や防災のためにしなければならないことは、山積みになっています。しかし日々の生活に追われ、そのことからだんだん遠ざかってしまいがち。今年は東日本大震災から4年、阪神淡路大震災から20年。私たちは災害に対してどれだけ切実でいるでしょうか。ここで紹介するのは、中学生の作文。寄り添いのあり方が綴られています。その心を持ち続けることが、災害を乗り越える一番大きな原動力と言えるでしょう。

第34回全国中学生人権作文コンテスト 広島県大会最優秀賞、法務省人権擁護局長賞

『寄り添いのあり方～「お母さん」の教え～』

福山市 盈進（えいしん）中学校2年 ヒューマンライツ部 国清（くにきよ） 彩（さや）さん

私は学校で、ボランティアと人権・平和の研究をするクラブに所属している。最近、私たちの部室に新しい仲間が増えた。それは、“加藤貴光さん”。

しかし、私は、実際に貴光さんにお会いしたことがない。というよりは、もう、誰もお会いすることはできないのだ。

私たちのクラブには、みんなが「お母さん」とお呼びする方がいる。彼女は“加藤りつこ”さん。りつこ「お母さん」と私のクラブは2012年の春、同じように、東日本大震災の被災者支援活動をしていたご縁でつながった。

「お母さん」の本当の子どもが加藤貴光さん。彼は、19年前の阪神淡路大震災で帰らぬ人となった。当時、神戸大学法学部の2年生だった貴光さんは、就寝中、自宅マンションが倒壊した圧迫の恐怖の中で息絶えた。国連職員になって世界平和に貢献するという夢は、震災で奪われた。1月17日の寒い日だった。

りつこさんは、助けられなかった自分を責め、貴光さんのお骨を抱いて涙が枯れるほど泣いた。床にも就かず、ご飯も食べずに。貴光さんの思い出まで枯れてしまうのが嫌で、仏花が枯れないようにと部屋には暖房も入れず、一日中仏壇の前に座り、お骨を抱いていたりつこさん。そんな姉を見て、妹さんは心配した。「このままでは病気になってしまう」

しかし、りつこさんはテコでも動かなかった。見かねた妹さんは、りつこさんの横にただただ座り続けた。あるとき、りつこさんがふと後ろを見て、居眠りをしていた妹さんの体に触れると、随分と冷たくなっていた。「このままでは、妹が病気になってしまう」と思い、りつこさんは慌てて「暖かい部屋へ行こう。お茶を飲もう」と声をかけた。

「“寄り添い”とは、その人が自ら立ち上がるまで、共にそこに…」。りつこさんが私たちに教えてくれた“寄り添い”のあり方。私は、自分の言動を見つめ直した。

貴光さんが「お母さん」に送った、生涯でたった一通の手紙がある。「親愛なる母上様」と題されている。レポート用紙一枚にぎっしりとつづられた母への感謝の思い。

この手紙に心を揺さぶられた奥野勝利さんは、手紙に曲をつけて、貴光さんが残した母への思いを発信している。貴光さんの言葉一つひとつ、やさしく包み込んだこの歌が、私は大好きだ。私たちは、りつこさんの講演会のお手伝をさせていただくとき、必ずこの歌に手話をのせて歌う。りつこさんは、いつも静かに涙を流しながら優しく微笑んで喜んでくださる。私も手話をしながら、思わずもらい泣きしそうになる。

4月、クラブの先輩2人が国連に派遣された。先輩方は、貴光さんの夢を知っていたので、「お母さん」に電話して、こう告げた。

「私たちは、『お母さん』と貴光さんから、人間の本当のやさしさや目標を持つ意味を学んできました。だから、貴光さんがこの機会を与えてくださったと思っているんです。貴光さんが、私たちを国連に連れて行ってくださると思っています。お願いです。遺影をお借りできませんか」

「お母さん」は、電話口で泣かれていたそうだ。後日、りつこさんが直接、貴光さんを学校まで“連れて”来て下さった。

「今まで、“国連”という言葉を聞くたびに胸が苦しかった。貴光が、働くどころか、行くことさえできなかった国連に、あなたたちが連れて行ってくれるのね。電話をもらってから、貴光の表情も嬉しそうに見えるのよ」

りつこさんは遺影を見つめて、涙を流しながら優しく微笑み、先輩たちに遺影を託した。

今、貴光さんはいつも部室にいらっしゃる。優しい眼差しで私たちの活動の様子を見守って下さっている。活動中、何気なく目が合うと、自然と口元が緩んでしまう。そんな素敵な新入部員。「貴光さん、これからもよろしくお願いします！」

8月20日未明、広島市で大規模土砂災害が発生。安佐北区にお住まいのりつこさんが心配だった。次の日、りつこさんの無事を聞いて安心した。数日後、学校にりつこさんから一通のメールが届いた。

「被災者の知人から、掃除用のタオルや雑巾が足りないと聞いた。力を貸してください」

すぐに生徒会と共に全校に呼びかけ、翌日から寄付を募り、2日で3000枚も集まった。段ボール詰めの一番上に、手書きメッセージを添えて発送した。「私たちはこれからもずっと、被災者の方々と共にあります」

これは、東日本大震災被災者支援を続ける私たちのクラブのスローガンだ。それが今、避難所に貼られているという。

「人は誰かの支えによって立ち上がることができる」。「お母さん」の言葉だ。

私に大きな力はないけれど、そっと人を支えることのできる人になりたい。そのために私は、いつも傷ついた人々の存在を意識し、彼らから学び、彼らにずっと寄り添うことのできるこころを育てたい。

読んでみる

「お母さん」こと加藤りつこさんのブログでは、ご自身の講演等を通した交流や、盈進学園ヒューマンライツ部の活動を紹介しています。

アイビーの独り言｜加藤りつこのブログ http://ameblo.jp/nobleheart/

現地レポート

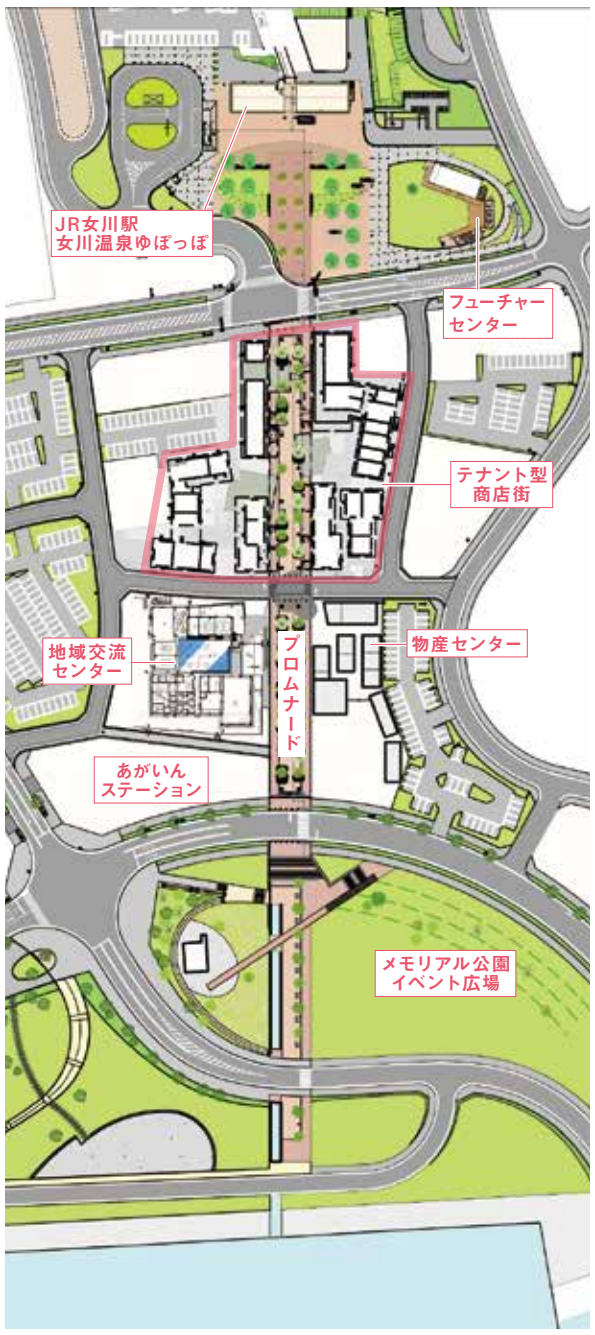
宮城県女川町の新しいまちづくり

取材·文＝磯達雄

駅から続く海への道 女川町の新しいシンボルゾーン

ついに復活。新しい女川駅が開業して、JR石巻線が全線開通する。中心市街地のほとんどが津波によって失われ、町民の集まる場所が、仮説商店街や病院周辺等、限られた状態の女川町だが、駅の周辺では、かさ上げの工事が急ピッチで進んでおり、海への視界が開けた新しい中心市街地づくりが姿を現そうとしている。

1. 女川駅周辺シンボル空間



女川駅はJR石巻線の終着駅。東日本大震災の津波によって線路と駅が流失したが、いよいよこの3月21日に鉄道が再開する。新しくなった駅舎は、プリツカー賞を受賞した世界的建築家の坂茂氏の設計によるもの。ウミネコが羽ばたく姿をかたどった、白い屋根が目に鮮やかだ。

駅の周辺では、今後も整備が進む。駅からは海に向かってまっすぐにプロムナード（歩行者専用道）が延び、これに沿ってフューチャーセンター（NPO主体の活性化支援施設、3月28日オープン）、あがいんステーション（水産業体験館、今春オープン）、地域交流センター（今秋～年内オープン）、テナント型商店街（今秋～年内オープン）、物産センター（来秋オープン）などを配置。近くには女川町庁舎も建設される予定だ。

駅舎の開業は、これら中心市街地整備の先陣を切るもの。そのため、鉄道の再開に合わせて、3月21日にはまちびらきのイベントも催される。

駅舎の３階には展望デッキがあり、そこからは美しい女川湾の海が見えるはず。実は当初の復興案には巨大な防潮堤もあった。しかし計画を検討するなかで、海に近い中心市街地全体をかさ上げすることで対応し、海への視界を遮る巨大な防潮堤はなくなった。

計画をまとめていくにあたっては、町民の意見を幅広く反映させることを目的とした、まちづくりワーキンググループも組織された。平成25年度の活動では、テーマごとに分かれてワークショップを実施。女川町復興推進課の山下順氏によると、プロムナードを含む観光交流エリアの整備については、「２人がけのベンチを置こう、ロマンチックな夜景の演出を行おう、などといったユニークなアイデアが集まった」。それをもとにして、「くどける水辺のあるまち」と、少し大胆なキャッチフレーズで提言をまとめている。

町民が将来の町の姿を自ら考え、「海に向かって開かれたまち」という独自のかたちを選び取る。それを象徴するのが、この女川駅周辺の都市デザインだと言えるだろう。

右の白い屋根の建物が駅舎。写真左側の海までプロムナードが繋ぐ（2015年2月20日撮影）

行ってみる

女川温泉ゆぽっぽ

震災の前、女川駅の隣りには、町営温浴施設「女川温泉ゆぽっぽ」があった。これを新しい駅舎と合わせて再建。まちびらきの翌日にオープンする。施設づくりには、ヴェネチア・ビエンナーレ絵画部門で名誉賞を受賞した日本画家の千住博氏と、JR九州の寝台列車「ななつ星」などを手がけたデザイナーの水戸岡鋭治氏がアートディレクターとして参画。２階の内壁に、千住氏が描いた樹木と一般公募で集まった900点あまりの花の絵を一体化させた巨大なタイルアートを完成させている。３階には展望デッキが設けられている。

女川温泉ゆぽっぽ　営業時間:9時～21時、休館日:毎月第3水曜、料金:大人500円・小人300円（予定）

読者プレゼント

以下ご記載のうえ、この右ページ下に記載の編集部宛（ハガキ／Fax／E-mail）にご応募ください。
①希望プレゼント（A～Dのいずれかを記入）　②郵便番号・住所・名前・電話番号・性別・年齢　③よかった記事のタイトル　④ご感想・ご意見　⑤本紙をどこで手に取りましたか？

A **女川町長クリアファイル 5名**（提供:一般社団法人震災リゲイン）
女川町長公認の町長のイラスト入りクリアファイル

B **『東北記録映画三部作』パンフレット 3名**（提供:一般社団法人サイレントヴォイス）
映画『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』監督談話や著名人の寄稿を収録

C **防災用オーラルケアキット 5名**（提供:サンスター株式会社）
被災時も口腔ケアは大切。口腔ケア用品＋解説DVDセット

D **LED懐中電灯 10名**（提供:プラス株式会社ジョインテックスカンパニー）
単三乾電池1本で点灯、軽量・小型・防雨形で携帯にも便利

※2015年6月20日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。　※個人情報は当選者への発送に使用させていただく以外は、第三者への提供等一切行いません。

2. にぎわいを呼びこむ商業施設

駅から延びる15m幅のプロムナードを挟んで、その両側に配されるテナント型の商業施設には、物販、サービス、飲食など様々な業種の店舗が入る。日用品エリア、工房エリア、飲食エリアの３つから成り、町民の日常生活の需要を満たすだけでなく、観光客が町を訪れたくなるような需要にも対応する。隣接する物産センターや地域交流センターとも連携した機能が期待されている。

建物を含めたエリアの設計は、星のや軽井沢などのリゾート施設を手がけた建築家、東利恵氏が担当。プロムナードと商業施設が一体化するようなデザインで、店先も人々が心地よく滞在できるよう工夫している。建物に囲まれたポケットパークのようなスペースでは、様々なイベントも想定。歩いているだけでも楽しい場所が、ここでは目指されている。

「女川の強みは鉄道の終着駅があること。レンタカー事業の誘致など機能も充実させ、観光客には女川を拠点に近隣の町を回ってもらうようにもしたい」と語るのは、この施設の整備主体となるまちづくり会社、女川みらい創造（株）の専務取締役を務める近江弘一氏。氏は女川町をホームタウンとするサッカークラブ、コバルトーレ女川のゼネラルマネージャーでもある。町の若い世代から、その手腕を買われてこの任に着いた。外から人を呼び込み、地域に根付かせる活動をしてきた経験が、商業施設の運営にも結びつくと期待されている。

“自分たちのためではなく、町のために”

設計者·東 利恵さん（東 環境·建築研究所）

初めて女川を訪れたのは、2014年の夏。木の一本もない造成地でした。それから女川みらい創造のメンバーや町役場と話し合いを重ねています。みなさんからは「自分たちのためではなく、町のために」という気持ちが伝わり、公共施設の仕事でこんなに風通しのよい現場は珍しいと感じます。先日テナントに出店する方も決まり、東京ではみなさんの顔や女川の風景を思い浮かべながら設計を進めています。海から見える景色にも配慮するなど、全体の魅力をどう高めていくか考えることはたくさんありますが、震災直後に考えた「いざなにかお役に立てることがあるときは力を尽くそう」という気持ちで臨んでいます。

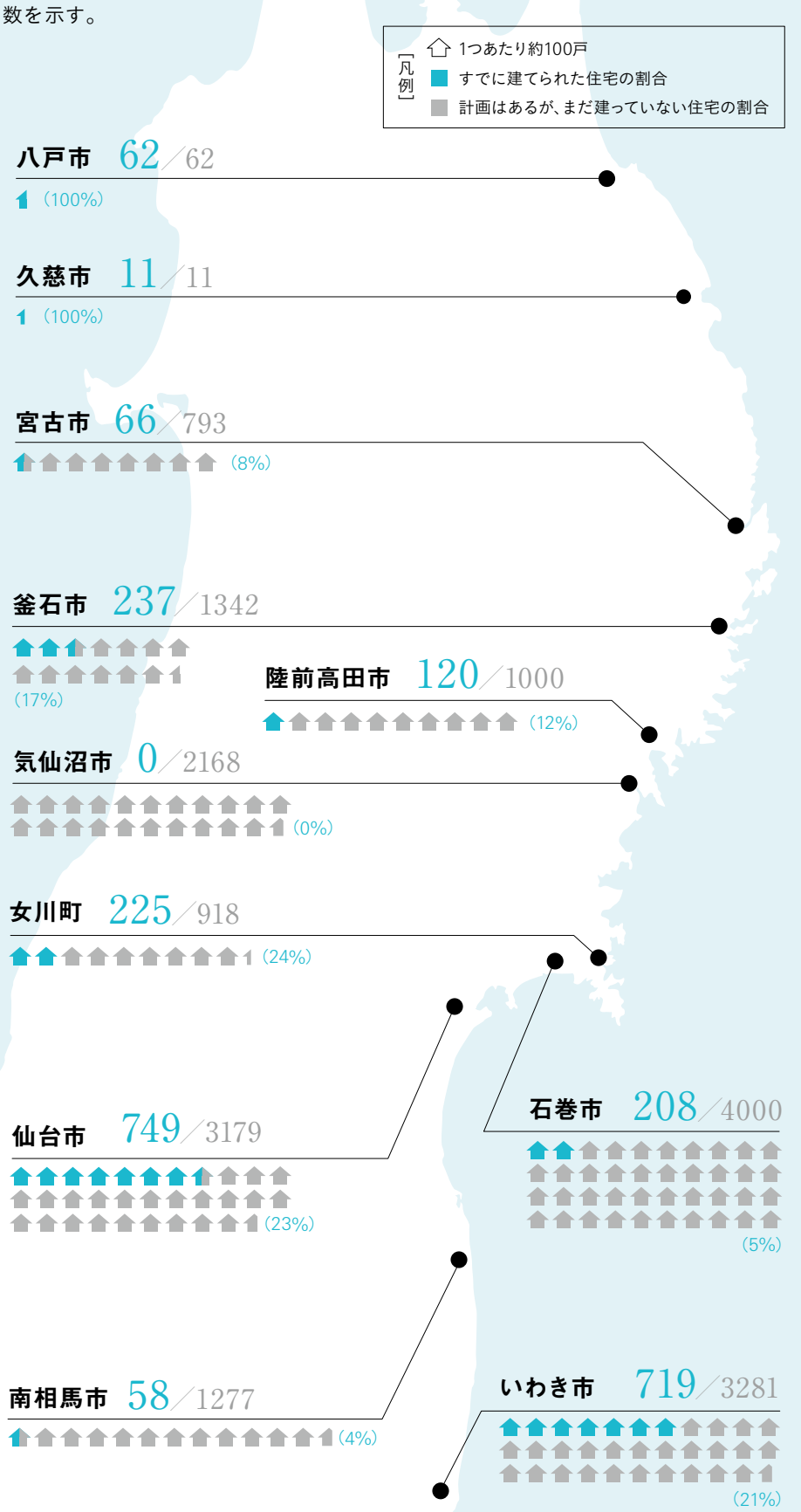
（取材·構成＝押野美穂）

災害公営住宅整備状況

平成26年12月末現在（単位:戸）

数字で見る復興の今

災害公営住宅とは、災害により住宅を失い、自力での住宅再建が難しい人のための、公営の賃貸住宅のこと。昨年までの供給率は約3割にとどまっているが、高台移転·かさ上げなどの土地造成が順次完了し始め、2015から2016年の2年間で、計画の約8割が供給される見込みだ。下図は、2014年末時点での東北4県（青森、岩手、宮城、福島）における各地域での完成数／供給計画数を示す。



データ出典元: 八戸市ホームページ「八戸市復興計画推進市民委員会ー東日本大震災からの創造的復興に向けて」、宮城県ホームページ「災害公営住宅の整備状況について」、岩手県ホームページ「災害公営住宅について」、福島県ホームページ「復興公営住宅の進捗状況」

震災リゲインプレスとは

震災復興の中間支援を行う（社）震災リゲインの発行するフリーペーパー。被災地の産品を買う、イベントに参加する、支援金を送るといった普段できるちいさな復興支援の紹介と、いつ起こるかわからない次の震災に備える情報を届けます。ウェブサイト〈http://shinsairegain.jp〉もあります！

ご意見、情報もお待ちしています

一般社団法人 震災リゲイン 震災リゲインプレス編集部　E-mail: info@shinsairegain.jp
〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6　Tel: 03-3584-3430　Fax: 03-3560-2047

協力（五十音順）: 伊藤羊一、岩室晶子、宇野健一、宇野求、岡本ナオト、川嶋直、日下部泰祐、栗山豊、佐々木晶二、佐々木豊志、秀巧社印刷株式会社、杉山昇太、鈴木敬幸、高木幹夫、中野民夫、長谷川巧、長谷川浩己、株式会社フリックスタジオ、水野哲雄

人と復興
— コラム —

20年後の責任を負える我々世代から復興の一歩目を

宮城県牡鹿郡女川町・須田善明町長に聞く

「女川は流されたのではない／新しい女川に生まれ変わるんだ／人々は負けずに待ち続ける／新しい女川に住む喜びを感じるために」

東日本大震災の二ヶ月後、小学六年生だった男子児童が詠んだ詩だ。当時大人達は混乱と不安の渦中にいたが、既に未来を見つめる子ども達に「はっとさせられたんです」と須田善明町長（42歳）は語る。

高校まで女川に暮らし、大学で東京へ。仙台で2年間働いた後、宮城県議を3期務めた。震災後、県政時代から信頼する安住・前町長の後を継ぎ、2011年11月より現職。県政で関わった石巻・牡鹿半島住民への恩を感じながらも女川町長の道を選んだ。

「骨を埋める女川の未来に、政治家としてどこまで全力を尽くせるか？　20年後に後悔したくない。先達が復興させた町を60代で引き継ぐのではなく、その一歩目から我々世代が結果責任も含め背負うべきではと考えました」と当時を振り返る。

女川町は、明治22年の女川村発足以来、120年間その枠組みが変わらない。地勢も影響し帰属意識の強い、水産業が根付く活力のある町だった。二代前の町長が父親。密集した中心と個性的な浜が幾つもある女川で、いつか責任のある立場にと若い頃から考えていた。「女川を背負ってきた先輩は昔から公共的な部分に対して常に時間と労力を注いでいた」。その姿を知る自分たち30～40代は、今も上の世代に「頼まれると断れない」と苦笑しながら、復興にも奔走する。町長にとって心の原風景だ。

復興を目指すまちづくりでは、「まち」という空間／場に、町民が自由に創造的に使える、居心地の良さと「幅」を期待する。「今の取り組みが10年後も正解かどうかは誰にもわからない。大ハズレかもしれない。町は生き物で、復興計画に“完成形”はなく、時代の中心となる世代が前向きにチャレンジ、更新できる幅が必要」と説く。同時に子ども達にも焦点をあて「有形無形の語り継ぐべきものはあるが、古い町への郷愁はあの日以降生まれた子ども達には無関係。新しい町が彼らの原風景になる。建物よりも“私は女川出身だ”と胸を張れる心の原風景をどう残せるかが大事ではないか」と、今も町に根付く世代を超えた信頼関係の継承を願う。

現在も仮設暮らしながら、国内外への出張も多く多忙な日々。政治家として数千人の町民に対し大きな責任を背負うが、一人ではない。常に「我々」と呼べる世代や業種を超えたたくさんの仲間＝町民が、女川の未来を模索し、悩み、様々な決断も躊躇なく更新しながら走り続ける。町は、ずっと生きている。

（聞き手＝相澤久美）

仮設庁舎の応接室にて。

須田善明町長ブログ
http://www.zenmei.net/

企業の取り組み

コーディネーター／中間支援の役割
復興計画策定後、各種事業や業種をつなぐ

中央復建コンサルタンツ株式会社

2011年6月、国交省は、被災した自治体の復興に向けた取組を支援するため「津波被災市街地復興手法検討調査」を開始。5つの調査*を実施した。この業務を遂行するため、土木技術に関する専門知識を持った「技術者」＝コンサルタントが、国交省地区担当チームの人々と共に各地に派遣された。

中央復建コンサルタンツの末祐介さん（41歳）は、同6月「市街地復興パターン調査」のため女川へ。10月「復興手法等の検討調査」を実施、翌年3月までに現在の復興まちづくり計画の骨子を作成し、4月からは女川町の発注を受け具体的なまちづくりのための法的整備、許認可など都市計画事業の準備に着手した。新しいまちづくり骨子は僅か数ヶ月の調査分析を元に作成された。

当時役場職員は震災後の激務に追われ、都市計画の技術を持つ人材も不足、町民意向の把握には限界があった。そんな中「女川町復興連絡協議会」（FRK）に出会う。民間有志が主体的復興を検討するため設立した団体で、多世代が参加する。末さんはコンサルタントとして受注した町の業務を遂行する際、町役場との協働に加え、FRKを通し町民の望む復興計画案や、各業界の復興に必要な情報、その他町のニーズを得ながら、町民の声を大切に、計画を進めた。「民間の声を行政計画の中に落とし込むこと」。この技術を持つのがコンサルタントだが、同時に「あれで良かったかは常に悩む。5年、10年後でなければわからない。当時計画した内容をよりよい方向に軌道修正できるよう、町に長く関わりたい」と語る。

現在、末さんらは3社共同の女川町復興まちづくりコーディネーターJVとして、行政や民間が実施する各種事業間の調整を手助けする。各所で新しいまちの造成工事が進む中、大切な部分は専門家の知恵や経験を入れ改善する仕組みが必要と町に提案。行政、民間、技術者、専門家が議論する「デザイン会議」も発足させた。施工中の計画も必要なら更新し、工期短縮や予算削減に繋げる。「初期の混乱した状態から復興のプロセスを見てきたことが、今のいろいろな事業の調整に役だっている」。

中間支援的な役割について聞くと「コーディネーターが役に立っているかどうかは証明が難しい」と謙虚。実際「いた時／いない時」の比較検討が不可能だからだ。しかし、「民間と行政の事業や状況を理解し必要に応じて繋がなければ復興計画策定・実施は困難。柔軟な町行政の対応と、経験を通じた町への理解があり、関わり続けることができた」と実感のこもった感想も聞かせてくれた。

異なる事業や立場の人々の間に立ち、双方を理解しながら繋ぎ役をするコーディネーション＝中間支援は必要だ。幅広い知識と経験に加え、「この人達の役に立ちたい」との想いを持つ、中間支援を担う人材育成は急務だ。

＊ ①被災現況等の調査・分析、②市街地復興パターン調査、③被災市街地の復興に向けた共通の政策課題への対応方策等の検討、④復興手法等の検討調査、⑤調査全体のとりまとめ、で構成。

中央復建コンサルタンツ株式会社
http://www.cfk.co.jp

編集後記

震災リゲインプレスが創刊してからの3年は、私の編集者歴と重なる。震災から丸4年が経ち、記憶や実感が薄れつつある中、東京にいる一編集者、あるいは地元に生きる一市民として何ができるのか。これからもこのメディアを通して考えていきたい。（山道雄太）

発行継続のための寄付のお願い

一人ひとりが震災に備え、復興を支え合う。そのための無料の震災専門紙である小紙をご支援願います。ご寄付者名は差し支えなければウェブサイトでご紹介し、また編集部宛（3面記載）にご住所を頂ければ小紙を毎号お届けします。

寄付する

以下いずれかにご入金ください　個人：1口3,000円／年　法人・団体1口30,000円／年から。

［寄付先］ゆうちょ銀行総合口座　記号番号：10000-82078551　口座名：震災リゲイン

ジャパンネット銀行 すずめ支店　普通　口座番号：8283215　口座名：一般社団法人震災リゲイン

震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

株式会社FREEing
www.freeing.co.jp

プラス株式会社
ジョインテックスカンパニー
www.jointex.co.jp

日能研

R-learning

NF We support Everything about Web marketing.

yamory